Interview

いきいきと働くための第一歩は、
専門性を活かし、様々な分野に
果敢にチャレンジすることではないでしょうか。
理工系の分野で、農業の分野で、
個性と能力を発揮し、
活躍している方々をご紹介します

フジノン株式会社
得意な分野だから力を発揮できる

女性の高学歴化が進む中、技術職、専門職で活躍したいという女性が増えています。さいたま市にある光学機器メーカー「フジノン」は、「ものづくりは人づくり」をキーワードに人材育成に取り組んでいる企業です。特に女性の能力活用を積極的に行っており、その実績が評価され、平成16年度埼玉県男女共同参画推進事業所として表彰されました。理工系大学出身の3人の女性従業員の方にお話を伺いました。

「医療機器の製造に携わる仕事がしたくて入社しました」という岡本絵美さん。現在、医用機器事業部の設計課に勤務しています。しかし、高い専門性が要求されるため、ときには壁にぶつかることもあるとのこと。そんなとき、同じ職場に目標となる女性の先輩がいるので、心強いといいます。「好きな分野で仕事をするのは、楽しいものです。今後は専門職を目指す女性がもっと増えてくれると、働きやすくなると思います」

一方、「自分が設計した商品が、評判がいいよと言われると、うれしいものですね」と語る本同由紀子さん。現在、光学設計部でレンズの設計を担当、自分の力を試せるこの仕事にやりがいを感じているといいます。

同社では、意欲のある従業員には資格試験制度など、性別や年齢に関係なく様々な能力の発揮の機会を設けています。当初は、男性が多い職場の中で自分が必要とされていないと感じたこともあったという本同さん。「でも、それは能力ではなく経験の差だと気づき、今は自分にできることを一歩一歩取り組むようにしています。今後は資格試験にも挑戦したいと思います」

また、昨年、2人目の子どもを出産したという樋口眞貴さん。約1年間の育児休職ののち、昨年6月から職場復帰し、知的財産室で特許管理を担当しています。同社を選んだ理由の一つは、女性の能力活用に加え、仕事と家庭の両立支援が充実していたから。現在、フレックスタイムを利用し、保育園の送り迎え等に役立てているそうです。「朝10時までに出勤すればいいので、出社前に子どもを病院に連れて行けるなど、とても助かっています。仕事は自分らしく生きるために必要なもの。上司や同僚の助けを得ながら、ずっと続けていきたいですね」と語ってくれました。

右から岡本絵美さん、本同由紀子さん、樋口眞貴さん、総務部の天野高宏さん

◆会社データ

従業員数 1,338人（女性206人、男性1,132人）
平均勤続年数 女性19年、男性21年
育児休職取得者 32人（平成15～17年）
主な制度 育児休職（子が1歳到達後の4月まで取得可能）／連続休暇制／ストック休暇制／キャリアエントリー制など

誰もがチャレンジしたいときにチャレンジできる社会に向けて
福沢恵子さん

プロフィール／ジャーナリスト、東京家政大学人間文化研究所助教授。21世紀職業財団中央雇用管理アドバイザーなどを務める。「ワーキングウーマンのサバイバルガイド―働く女性が落ち込みそうになったとき読む本」ほか著書多数。

Q 男女が同じように職場で力を発揮するために、必要なことは何でしょうか。

一番の問題は男女の生活時間の差だと思います。ジェトロの調査によると、男性が1週間で仕事に費やす時間は約58時間で、家事・育児に費やす時間は約4時間。一方、女性は仕事が約48時間、家事・育児が約27時間です。女性は仕事もしながら家事や育児を一手に引き受けているので、勉強したり、リフレッシュしたりする時間が少ないのです。まず、「女性だけが家事や育児を行う」という状況を変えなくてはならないでしょう。

Q 企業側に求められることは何でしょう。

これからは子育て・介護、海外留学、ボランティア活動……等、ライフステージによって働き方を変えられる社会が求められます。それには、男女を対等な労働者として、また生活者として位置づけることが重要です。そうすれば、男女で仕事と家事・育児を分担できますし、たとえばどちらかの収入が途絶えるなど、ライフステージの変化にも対応できるはずです。

また、少子高齢化社会には、女性の労働力が必須です。再就職を希望する女性には、能力も意欲もある人がたくさんいます。企業はこうした人材をもっと活用すべきです。それには再就職を希望する女性に対して一定の雇用枠を設けることを義務づける等の支援政策があってもいいと思います。

Q 女性が能力を発揮する上で、意識の面で阻害要因となっている部分はありますか。

女性の中には、能力があるのに「出世したくない」とか「ほどほどでいい」などと言う人がいます。それは、小さい頃からの育てられ方が影響しています。男の子は「男なんだからがんばれ」などと励まされることが多いのに対し、女の子は「がんばるのは女らしくない」などと抑えつけられるような言い方をされたりします。そのため、女性は大人になっても、上へ上へと進むことに尻込みしてしまうのでしょう。

でも、本来男性と女性に能力差がないことは、言うまでもありません。能力を伸ばせば、新しい世界が開けるかもしれないのです。せっかくそのチャンスがあるなら、ためらわないでチャレンジしてほしいと思います。

Q 「再就職をしたいけれど、やりがいのある仕事がない」という女性にアドバイスをお願いします。

再就職で希望どおりの仕事に就くのは難しいものです。だから、仕事をしていない時期に、資格を得たり人脈づくりをしたりというように、準備をすることが必要でしょう。それでも、すぐに希望どおりの仕事に就けるとは限りません。たとえば、正社員になりたくても、最初はパートタイムでしか雇ってもらえないということもあります。

でも、パートタイムで実務経験を積めば、将来的にはその技術を活かして希望の仕事に就くことができるかもしれません。「自分は経験を積ませてもらっているのだ」と考えれば、一時期、不本意な就業形態や賃金であっても、納得できるのではないでしょうか。そのように、現状を客観的に判断し、まず一歩を踏み出す。それが再就職を成功させる重要なポイントです。

農業体験「かあちゃん塾」主宰　萩原さとみさん
農業には人を動かす力がある

「わぁ、すごいね。大きいね」

土まみれになりながら、大根の収穫に奮闘する子どもたちに声をかける萩原さとみさん。豊かな自然が残る緑区で、土に触れたことのない親子に農業を体験してもらおうと、野菜や米作りのほか、郷土料理や伝統文化を伝える「かあちゃん塾」（ファーム・インさぎ山）を開いています。

「きっかけは、二男の小学校で行った生活科の授業のお手伝いをしたことでした。子どもたちの目がキラキラ輝いているのを見て感動したのです」

そんなとき、ちょうど目にとまったのが、農村で過ごす滞在型の余暇活動「グリーンツーリズム」を紹介した新聞記事でした。

「読んだ瞬間、私のやりたい農業はこれだ！　と直感しました」

もともと農家で生まれ育った萩原さん。しかし、同じく農業を営む夫との結婚が決まったとき、友人から「苦労するだけなのに……」と言われたひと言に、とても悔しい思いをしたのです。それ以来、「いつか農業の素晴らしさを伝えたい」という思いを抱き続けてきたといいます。

そこで、夫の両親から受け継いだ自宅の畑を開放し、四季折々の農業の素晴らしさを味わえる場を提供しようと決意したのです。そして、平成8年、思いきって「グリーンツーリズム」の先進地であるフランス、ドイツを視察。ノウハウを学び、翌年の春に「かあちゃん塾」を始めました。

「私にこうした行動力を与えてくれたのは、夫の両親でした。農家の女性が低く扱われる風潮があるなか、話し合いの場に同席させてくれるなど、私を尊重してくれたのです。一人の人間として認めてもらったことで、私は自分の力を発揮することができたのだと思います」

毎月第二土曜日、萩原さんの畑にたくさんの親子が集まってきます。

「農業はまさに体験から学ぶ総合学習です。土づくりでは理科、農村文化では社会、またお年寄りやプロの人も時には参加して、みんなで色々なことを学びます」

さらに、この塾にはボランティアスタッフとして、知恵と経験を持った人たちが手伝いにやってきます。

「ある年配の男性が薪（まき）割りをして見せたところ、みんなから拍手が起こったのです。子どもの頃は辛いだけの作業でほめられることはなかったのにと言って、喜んでくれました」

「農業には人を動かす力がある」という萩原さん。

「この塾を通して、これからもみんなが認められ輝けるステージを提供していきたいですね」

古い慣習にとらわれて女性の参画が遅れていると言われる農業。「でも、信念を持ち突き進んでいけば、応援して下さる人が現れますから」と、最後に語ってくれました。

12月は冬野菜の収穫と餅つきを体験。